『検察側の証人』のメタ語用論的分析

堀田　知子・稲木　昭子・沖田　知子

▶キーワード

語用論的標識　伝達法
メタ語用論的表明
社会言説　情報デザイン

▼要　旨

本稿では、アガサ・クリスティの裁判劇『検察側の証人』のデザインと技巧のいくつかの側面を考察する。Culpeper & Haugh（2014: 241）のメタ語用論的意識の指標を使って、とくに読者や観衆の心理的反応を操作するために、作者がいかに効果的に語を選び筋立てを構成しているかを例証する。具体的には、2人の登場人物―レナードとロメイン―の台詞でこれらの指標がみられる言説を中心に、レナードに関しては主として語用論的標識、ロメインに関しては伝達法と社会言説を問題にする。そして最後の山場に関してはメタ語用論的表明、さらには指標を使わないという技巧を考える。これらの指標によって談話の流れの管理を考察し、サプライズを演出する作者の情報デザインの技法を明らかにする。

1．はじめに

アガサ・クリスティ（Agatha Christie）の裁判劇『検察側の証人』（*Witness for the Prosecution*）は、最後のあっと驚くどんでん返しの見事さで知られ、彼女の最高傑作の1つとされている。そこには計算し尽されたことばの使い方をみることができる。作品の概要は次の通りである。

弁護士のウィルフリッド卿は、レナード・ヴォールという青年の弁護をすることになる。彼は最近親しくなったエミリ・フレンチという資産家の老婦人殺しの容疑者であった。失業中の貧乏発明家である彼にとって、状況証拠は圧倒的に不利なものであったが、彼は犯行時刻には家でドイツ人の妻ロメインと一緒にいたと無罪を主張する。レナードが頼りとするのは妻の証言だけであったが、第1回目の公判では、ロメインがあろうことか検察側の証人として出廷し、

そのアリバイを否定しただけでなく、彼が血の付いた衣服で帰宅したと証言してウィルフリッドやレナードを愕然とさせる。レナードの命運は尽きたかに思われたが、その公判の直後に1人の女が手紙の束を持って、ウィルフリッドを訪ねてくる。それはロメインの驚くべき企みとレナードの無実を証明するものであり、女はウィルフリッドから手紙と引き換えに金を受け取って姿を消す。第2回の公判では、その手紙が証拠として提出され、ロメインの企みが暴かれてレナードは無罪となる。しかし、その後に誰もが予想しなかったさらなる驚きの展開が待ち受けていた。

Culpeper & Haugh（2014: 241）は、メタ語用論的意識の指標（indicators of metapragmatic awareness）として4種―語用論的標識（pragmatic markers）、伝達法（reported language use）、メタ語用論的表明（metapragmatic commentary）、社会言説（social discourse）―をあげている。これらは、情報の使い方、伝え方、織り込みや盛り込み、また解釈の枠組みを意識させるものである。本論では、これらメタ語用論的意識の指標を使って、この作品のデザインと技巧のいくつかの側面を考察する。とくに、読者や観衆の心理的反応を操作するために、作者がいかに効果的に語を選び筋立てを構成しているかについて考察する。作品中でこれらの指標がみられる言説を中心に、レナードに関しては主として語用論的標識、ロメインに関しては伝達法と社会言説を問題にする。そして最後の山場に関してはメタ語用論的表明、さらには指標を使わないという技巧も考えてみたい。これらの指標によって談話の流れの管理を考察し、サプライズを演出する作者の技法を明らかにしたい。

2．レナードのことば

レナードのことば遣いに着目して、印象操作の効果をみる。まずワードスミス（*WordSmith Tools*）を使って作品中の*I mean*を検索すると25例が抽出され、その分布は図1のプロットになる。コンコーダンス・ラインからそれぞれの発話者を特定していくと、そのうち23例はレナードであり、残りは女性2人（証人ジャネットと秘書グレタ）が1回ずつ使用しているだけである。しかもレナードの例のうちの22例は物語の20%までに出現し、レナードがウィルフリッドに弁護を依頼するときに集中して使われている。このレナードに特徴的な*I mean*を中心に考えてみたい。

語用論的標識*I mean* をSchiffrin（1980: 213–14）はmeta-talkとして言い換えや言い直しの

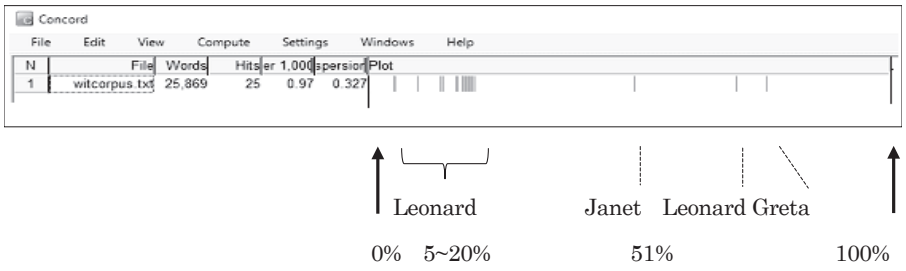


図1　*I mean* のプロット

機能をもつと指摘している。垣根表現と同じく、発話の力を弱めることで断定的には言えない話し手の心の揺れを表すとともに、談話の流れを管理する意識を示すものである。

まずは、会ってすぐに事務弁護士メイヒューと交わしたレナードの台詞をみてみたい。

(1) LEONARD. ... What I mean is, I can't believe it's *me* this is happening to. I keep thinking—perhaps it's all a dream and I'll wake up presently.
MAYHEW. Yes, I suppose one might feel like that.
LEONARD. (*Moving to* R. *of the desk*) What I mean is—well, it seems so silly.
MAYHEW. (*Sharply.*) Silly, Mr. Vole?
LEONARD. Well, yes. I mean I've always been a friendly sort of chap—get on with people and all that. I mean, I'm not the sort of fellow that does—well, anything violent. (*He pauses.*) But I suppose it will be—all right, won't it? I mean you don't get convicted for things you haven't done in this country, do you? (I: 368)
(網掛けと下線は筆者、以下同じ)

(1)ではレナードがことばを選んで述べている様子が窺われ、*I mean* が3回使われている。さらに *perhaps, seems, well, sort of, suppose* といった語用論的標識が多用され、伝達法の付加疑問が2回、さらには *I mean* の変種の *what I mean* も2回使われている。言い直し、言いよどみや垣根表現などを多用することにより、自ら提供する情報の信頼性を弱めようとしている。これらの意識的使用が重層的になされ、総じて自分の置かれた事態に戸惑い、自身についてでさえ自信なさげに語る気弱な若者といったイメージを、最初の段階から醸し出しているといえよう。

妻のロメインについて述べるところでも *I mean* が巧みに使われている。

(2) MAYHEW. Did you see anyone you knew on the way?
LEONARD. No, but does it matter? I mean Romaine. . .
SIR WILFRID. The evidence of a devoted wife unsupported by any other evidence may not be completely convincing, Mr. Vole.
LEONARD. You mean, they'd think Romaine would tell a lie on my account?
SIR WILFRID. It has been known, Mr. Vole.
LEONARD. Oh, I'm sure she would, too, only in this case I mean she won't be telling a lie. I mean it really is so. You do believe me, don't you? (I: 379)

(2)では *I mean* が3回使われている。ここでレナードはウィルフリッドに対し、本当のことなのだから妻が自分をかばって嘘をつくことにはならない、と *I mean* を繰り返しながら気弱なようすで話す。またそれ以外でも、語用論的標識や付加疑問などを使ってさまざまな気配りをみせ、殺人のような大それたことなどしそうにない人間という印象を与える。

その印象操作の効果は、レナードと面談したウィルフリッドのことばから量ることができる。メタ語用論的表明に語用論的標識の1つである談話標識を差し挟みながら、態度を決めていく。

(3) MAYHEW. He certainly is. How does he strikes you?

SIR WILFRID. (*Crossing to* L. *of* MAYHEW) ① Extraordinarily naïve. Yet in some ways quite shrewd. ②Intelligent, I should say. But he certainly doesn't realize the danger of his position.

MAYHEW. Do you think he did it?

SIR WILFRID. I've no idea. ③ On the whole, I should say *not*. (*Sharply*.) You agree? (I: 381–82)

(3)でウィルフリッドは程度を意識して*extraordinarily, quite* や *certainly* を使いながら、①でレナードの印象を *naïve* と *shrewd* という一見矛盾するようなメタ語用論的表明を行っている。*yet* という逆接の談話標識を挟んで、レナードのナイーブさとともにそのしたたかさをも見抜いていることがわかる。続く②でも *intelligent* と言いつつ、*But* を使って立場の深刻さに気づいていないとその甘さも指摘する。レナードが犯人だと思うかというメイヒューの質問にはわからないと言いながら、③では *On the whole* で考えをまとめ、レナードはやっていないだろうと *should* に期待感を込める。逆接の *yet* や *but* を使って裏腹の評価を与えながらも、結局は世間知らずで事態をよく理解していない危うさを指摘している。このようにレナードの二面性に薄々気づきつつも、百戦錬磨のウィルフリッドは弁護人を引き受けることとなる。レナードが見せることば遣いの効果といえよう。

3．ロメインの場合

3.1 他者のことばを借りる

主として2点から、ロメインの台詞の特徴および彼女に関係する言説をさぐり、その文体をとる作者の狙いを捉える。1点目はロメインの台詞には、伝達法の中の〈他者のことばを借りて〉語る引用法がよくみられる点である。ロメインが最初に登場するのは第1幕の弁護士事務所の場面で、夫の置かれている状況を探るためにやってきたロメインが、夫のことばを借りて自らの真偽の判断を明らかにせずに会話を運ぶ場面である。

(4) SIR WILFRID. ... Mr. Vole, however, tells me that he has an absolute alibi for that time, since he was at home with you at nine-thirty.

(*There is a pause.* ROMAINE *does not speak although* SIR WILFRID *looks at her.*)

That is so, is it not? He was with you at nine-thirty?

(SIR WILFRID *and* MAYHEW *looks at* ROMAINE.)

ROMAINE. That is what Leonard says? That he was home with me at nine-thirty?

SIR WILFRID. (*Sharply*) Isn't it true?

(*There is a long silence.*)

ROMAINE. (*Moving to the chair* L. *of the desk; presently*.) But of course. (*She*

sits.）　（I: 387）

⑷でウィルフリッドはロメインに、レナードが9時半には彼女と家にいたということを確認しようとするが、彼女は質問には答えずに「レナードがそのように言っているのですか。9時半に私と一緒に家にいたと？」と、夫の発言であるかどうかを逆に質問する形で対処する。あくまでもアリバイに対する自分の真偽の判断を回避し、話を展開させていく。

⑸ SIR WILFRID. Mrs. Vole, do you love your husband?
ROMAINE. （*Shifting her mocking glance to* MAYHEW）Leonard says I do.
MEYHEW. Leonard Vole believes so.
ROMAINE. But Leonard is not very clever.　（I: 389）

⑸で弁護士はロメインに彼女の気持を問い質すが、これに対しても、彼女は通常の答えとしてのyes / noの形で言質を与えずに、「レナードはそのように（私が夫を愛していると）言っていますけれど」と、レナードのことばを借りる形で返事をする。これでは本当に夫を助けたいと思っているのであろうか、と相手に疑惑を抱かせるような答え方である。

第2幕の公判では、ロメインは夫に不利になることを夫自身のことばを使って証言する。夫のことばを借りることで自らの心情を明らかにすることなく、夫が犯人らしいことを淡々とした口調で述べる。これは敗戦の混乱時のドイツから脱出させてくれた夫の恩を忘れた非情な女と思わせる効果をもたらすことにもなる。

⑹ MYERS. What happened next?
ROMAINE. He told me that I was to say he had been at home with me all that evening, especially he said I was to say he was at home at half past nine. I said to him, “Do the police know you’ve killed her?” And he said, “No, they will think it’s a burglary. But anyway, remember I was at home with you at half past nine.”
（II: 414）

⑹でマイヤーズ検事に事件当夜のことを聞かれたロメインは、「主人はあの夜はずっと私と家にいたと言うようにと私に言いました、特に9時半には家にいたと私が言うようにと言いました。私は『警察はあなたが殺したことを知っているの』と尋ねたところ、彼は『警察は強盗の仕業だと考えるだろう。とにかく9時半には家にいたと言うことは忘れるな』と言いました」と、自分が述べていることはレナードが言えと言ったことばであると述べる。他者のことばを借りて語ることで、あくまでも自分には伝達内容に責任がないことを示唆する。

ちなみにロメインのことば遣いは、その内容の真偽というよりは、むしろ直接話法と間接話法の切り替えや*I was to say*の繰り返しにより、外国人らしい不器用な文体がレナードに言わされているという印象を与えるのに功を奏しているといえよう。

3.2 「外国人」ロメイン

ロメインは自分が外国人であるという点を印象づける表現を意識的に使っている。この点は他の登場人物の方にも認められ、そこではロメインが外国人であることをことさら強調することが多々みられる。しかもこの「外国人」は、当時の英国社会では信用されていないことを示す文脈に出てきており、英国の司法制度にも慣れていない、感情的になってことばも理解できないなど、ロメインに対する負の評価を決めつける方向へと繋がっていく。この点で作者のロメイン像を浮き彫りにする狙いがみえてくる。

(7) Sir Wilfrid. She's a foreigner, too. Nine out of the twelve in a jury box believe a foreigner is lying anyway. She'll be emotional and upset, and won't understand what the prosecuting counsel says to her... (I: 382)

(7)でウィルフリッドはレナードが警察に連行された後、メイヒューに向かって「それに彼の妻は外国人で、陪審員12人のうち9人までが外国人は嘘をつくと思っている。おそらく彼女は感情的になって取り乱し、検事が彼女に向かって使うことばも理解できないだろう」と、ロメインが弁護側の証人になることを前提に裁判の成り行きを心配する。

(8) MAYHEW. (*Thoughtfully*) I don't think the Jury liked her.
SIR WILFRID. No, you're right there, John. I don't think they did. To begin with, she's a foreigner, and they distrust foreigners. Then she's not married to the fellow—she's more or less admitting to committing bigamy.
(MAYHEW *tosses the pipe cleaner into the fireplace, then crosses to* L. *of the desk.*)
None of that goes down well. And at the end of it all, she's not sticking to her man when he's down. We don't like that in this country. (III: 427-428)

(8)では、陪審員が抱いたと思われるロメインに対する反感の理由をウィルフリッドが1つずつ挙げていく。まずは彼女が外国人で、陪審員は外国人に不信感を抱いていること。2番目にロメインは重婚であること。3番目に窮地にある夫を支えなかったこと。ここにみられる外国人や妻に対する当時の社会言説が、解釈の枠組み（frame of interpretation）として、この戯曲の仕掛けの底流をなしていることがわかる。

(9) ROMAINE. I did not know what to do. I do not know your country and I am afraid of the police. So I write a letter to my ambassador, and I say that I do not wish to tell any more lies. I wish to speak the truth. (II: 415)

(9)では逆にロメインが*your country*と言って、自分はこの国では外国人であることを印象づけることで、夫に不利な証言をするという自分の行動を正当化しようとしている。

⑽ Myers. . . . Mrs. Heilger, you are, I think, of a highly nervous temperament. Being a foreigner you may not quite realize the responsibilities that lie upon you when you take the oath in an English court of law. . . . (III–II: 441)

⑽ではマイヤーズはロメインに向かって、英国の法廷での宣誓に伴う責任について、外国人であるあなたはよくわかっていないのではないかと述べ、外国人に対する社会言説の一端を示す。なおここではロメインの重婚の告白を受けて、正式名（ハイルガー夫人）で呼んでいる。

3.3　2つの指標

レナードの無罪の判決にはロメインの重婚の事実に加え、2種の社会言説―①妻は夫に不利になるような証言はしなくていい、②一般的に外国人の証言は信用できない―が働いている。1回目の公判でロメインは、①にもかかわらず夫に不利な証言をした。②により弁護士をはじめおそらく陪審員もロメインの証言には懐疑的である。第2回目の公判で証拠として提出された手紙により、ロメインの工作が明白となり、第1回目の証言は偽証とされる展開となる。

一方ロメインの狙いは、②の自分が外国人であるということに注意を向けさせ、自分に対する不信感を煽り、夫の無罪を勝ち取ることであった。実際ロメインは真実を証言していたにもかかわらず、周りがこの2種の社会言説に大きく影響を受け、彼女の証言を嘘と決めつけたことになる。

真実を述べているにもかかわらず偽証と思わせるロメインのこの工作には、外国人にはことばのハンディキャップがあるという点が大きくかかわってくる。英国で外国人であるロメインは、母語話者とは英語能力において劣っているとみなされる。そこでこの不利な立場を逆手にとって、他者のことばを利用するという、一見稚拙な形を使っている。結局はそれが自らの判断を避けるテクニックとして見事に巧を奏しているのである。

このメタ語用論的意識を明示的に表す2つの指標をロメインの描き方の特徴とするならば、ロメインは当時の外国人に関係する社会言説を枠組みにして、自らの断定を避けて他者のことばを駆使することにより、真実を嘘に仕立て上げることに成功し、夫の無実を勝ち取ったことになる。

4．真実のことば

レナードの無罪判決を勝ち取ったウィルフリッドは、ロメインが自分の偽証を示す手紙を捏造してまで身を捨てて無実のレナードを救おうとしたと思い、そこまでしなくても、自分たちやイギリスの司法制度を信じて欲しかったと彼女に言う。ここにきてロメインにより、隠されていた最後の真相が暴露される。認識的動詞の用法にみられる技巧をみてみよう。

⑾ ROMAINE. I couldn't risk it. (*Slowly.*) You see, you ①*thought* he was innocent...
SIR WILFRID. (*With quick appreciation.*) And you ② *knew* he was innocent. I ③understand.

ROMAIN. But you do not ④understand at all. *I* ⑤knew he was *guilty*.
SIR WILFRID. (*Thunderstruck.*) But aren't you afraid?
ROMAIN. Afraid?
SIR WILFRID. Of linking your life with a murderer's.
ROMAINE. You don't ⑥understand—we love each other. (III–II: 445)

⑾では、「あなたは彼が無実だろうと①思っていた」というロメインの発話の裏には、自分はそうだとわかっていたけれど、という気持ちがあると考えたウィルフリッドは、「あなたは②知っていたのですね」と言う。そして「③わかっていますよ」と続ける。これに対しロメインは、ウィルフリッドのこの認識は誤りなので、「あなたは④わかっていない（あなたの考えはまちがっている）」と言い、自分は実際は「彼が有罪だと⑤知っていた」と言う。

ここでウィルフリッドは、ロメインが殺人を犯したレナードに言われるままに彼を救う行動を取ったと考え、「殺人犯と生活を共にするのは怖くないのですか」と聞く。ロメインはウィルフリッドのこの認識の誤りを指摘して「あなたは⑥わかっていない」と言い、自分とレナードは愛し合っていると言う。

互いに相手のことばの奥にある認識を汲み取りながらのやり取りで、非叙実動詞の *think*、叙実動詞の *know*、2通りに使い分けられている *understand* など、メタ語用論的表明を表す動詞を巧みに使い分けている。*understand* は、③は非叙実、④⑤は叙実と切り替えることにより、両者の認識の違いを浮き彫りにしている。

ところが最後になって、ロメインはレナードの不実を知ることとなる。

⑿ ROMAINE. After all I've done for you ... What can *she* do for you that can compare with that?
LEONARD. (*Flinging off all disguise of manner, and showing coarse brutality.*) She's fifteen years younger than you are. (*He laughs.*) (III–II: 445)

⑿で若い女に乗り換えようとする夫に訴えかけるロメインのことばには、万感の思いが詰まっている。自らを貶めることにより夫の窮地を救った献身に対し、レナードは本性を現し、年上妻であるロメインにとって残酷な事実を突きつける。レナードのことばは、情け容赦なく現実を暴く真実のことばである。ここで、前半の *I mean* を多用した気弱なイメージを覆す。

絶望したロメインは、事後共犯や偽証で裁かれるよりは、唯一愛した人を殺して裁かれたいと言ってレナードをナイフで刺殺する。

⒀ ROMAINE. (*Picks up the knife from the table. Throwing her head back in sudden dignity.*) No, that will not happen. ①I shall not be tried as an accessory after the fact. I shall not be tried for perjury. I shall be tried for murder—(*She stabs* LEONARD *in the back.*) the murder of the only man I ever loved.
(LEONARD *drops. The* GIRL *screams.* MAYHEW *bends over* LEONARD, *feels his pulse and shakes his head.*)

(*She looks up at the* JUDGE's *seat.*) ②Guilty, my lord.

CURTAIN

⒀の①では否定の意思表現 *I shall not be tried* を 2 度繰り返した後に *I shall be tried for the murder* と畳みかける構成となっている。そして②と自ら有罪と申告し、幕となる。この最後のロメインのことばは、それまでとは一転して意志が強く表されたものであり、真実のことばとして直接響いてくるものである。

5．おわりに

本論では、裁判劇におけることばの意識的使用についてみた。対話において、相手の認識や主張と自分のそれとの間に齟齬や対立がある場合、あるいは自分の目論見を遂げたい場合などには、その流れを管理する必要が出てくる。この流れを左右する効果的なことば遣いに着目し、このメタ語用論的意識に基づく流れの管理について考察した。命題部をなす概念的意味の重要さもさることながら、それをどのように評価・伝達し、あるいは相手をどのように導こうとするのか、という情報処理上の修整（elaboration）の重要さにも注目する必要がある。このようなメタ語用論的意識の流れという観点からこの作品を見ていくと、さらに作者による巧みな情報デザインの構造がはっきりと浮かび上がってくる。

使用テクスト

Christie, Agatha（1993）*The Mousetrap and Other Plays*, William Morrow, New York.

参考文献

Chapman, Siobhan and Billy Clark（2014）*Pragmatic Literary Stylistics*, Palgrave Macmillan, London.

Culpeper, Jonathan and Michael Haugh（2014）*Pragmatics and the English Language*, Palgrave Macmillan, London.

堀田知子（2008）「物語言説における情報操作の技法」『龍谷紀要』第29巻第 2 号 15-26.

稲木昭子（2013）『謎解きのことば学―アガサ・クリスティの英語を楽しむ―』英宝社.

毛利可信（1980）『英語の語用論』大修館書店.

沖田知子（2016）「メタ語用論的意識の流れ」『時空と認知の言語学 V』（言語文化共同研究プロジェクト2015）11-20.

Schiffrin, Deborah（1980）“Meta-Talk: Organizational and evaluative brackets in discourse,” *Sociological Inquiry* 50, 199-236.

＊本稿は、AULLA 2016（2016年12月 7 日セッション4a “Popular Genre Fiction”）に採択された “A Metapragmatic Approach to *Witness for the Prosecution*” に加筆、修正をしたものであり、JSPS 科研費（JP15K02598）の助成を受けたものである。